
umbrella

河崎 シズク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Umbrella

【コード】

N9937P

【作者名】

河崎 シズク

【あらすじ】

そこにあるのが当たり前。けれど、案外そんな存在こそが、私を支えてくれていたのかもしれない

はあ、さいあく。

雨が降るなんて聞いていない。

朝の天気予報でもそんなことは言っていないかった…はずだ。もちろん傘なんて持ってきていない。

学校に置いてあったはずの折りたたみ傘も、こういつとときに限ってなかったりする。

これじゃあ帰れないじゃん。

腹いせに気まぐれな空を睨んでみた。…むなしい。思わずため息が漏れる。

このまま待っていてもやむとは限らない。けど、この大雨の中ぬれて帰るなんて絶対に嫌だ。

あー、ゆううつ。

「早くやまないかなあ」

なんとなく呟いてみた。

「そうだなあ、せめてもうちょっと弱くなってくれば帰れるのになあ」

「うわあッ!」

いつの間にか私の隣にあいつがいた。

家が隣で、幼馴染で、子供っぽくて、意地悪で

「なんだよ、そんなに驚くなよ。地味にシヨックだよ」

「お、脅かさないでよ。やめてよね、びっくりした」

ホント、心臓が止まるかと思った。

「はは、悪い悪い。別に脅かすつもりはなかったんだよ。俺はただ気づかれないように忍び寄っただけ」

そう言っただけは二カツ、と無邪気な笑みを浮かべた。

いや、いきなり隣に人がいたら誰だっけって驚くって。

だけど、それを言ったところで辞めるようなやつじゃないのだ、あいつは。

昔からそうだった。あいつはいろんないたずらを仕掛けてきては、私の反応を見て楽しんでた。それは高校に入った今も変わっていない。

高校生になってから、ちょっとは成長したと思ってたんだけどなあ。

と、思わずため息。

「何だよ、ため息なんかついて。……あ、ひょっとして彼氏待ち？俺邪魔か？」

……なんでそんなにうれしそうなのかな。

「ばーか、そんなんじゃないって」

私はそう言っただけから視線を外した。

「……ふうん」

あいつは無駄にためてからそれだけつぶやいた。沈黙。

手持ち無沙汰になって、分厚い雲に覆われた空を見上げる。

まだやみそうにないなあ。

ちら、と横目に隣を見ると、あいつも灰色に包まれた空を眺めていた。

その横顔は何かを考えているようにも、なにも考えていないようにも見えて

ふと、あいつと目があった。

なんかあわてた。なんでかはわかんないけど。

「送って行くのか」

「……は？」

「だから、送って行くのか、って。家、隣じゃん」

……いきなり何を言い出すんだこいつは。

「いいよ、別に。もう少しここにいるし」

「けどよ、なんかやみそうにないぜ？ この雨の中濡れて帰んのか
よ」

妙に食い下がるあいつ。

「別にいいの、私の勝手じゃん。あんたは帰ればいいでしょ」

「あー、まあ。いや、そうは言うけどな……」

あいつは人差し指でぽりぽりと頬をかいてから、

「だって、お前傘持ってないじゃん」

ぱつ、と、思わずあいつの顔を凝視する。

「あ……」

か細い声が漏れて、ぱつが悪くなってうつむいた私に、

「そんなおまえとは違ってほら、俺はちゃんとしてきたぞっ！
自慢げに傘を私のほうに突き出してきた。……嫌味か、嫌味なの
か。」

「もう帰っちゃえよあんたなんか」

「ひでえ！ 俺の親切心を何だと思ってるんだ！」

いや、嫌味にしか聞こえなかったけど。

「しかも一本しかないじゃん」

「う……、まあそこはほらそのー、なんだ、だからあれだ、ほ、ほ
ら、世の中には相合傘というものが「嫌」……これはまたえらく決
断の早いことで」

即答で断る。どうして私があいつなんかと

そんなに嫌なのかよ……、と両膝を突いてうなだれるあいつ。

「まあ、いいからいいから。濡れて帰るよりはましだろ？」

良くも悪くも立ち直りのはやいあいつは、そう言うど持っていた黒い傘を広げた。

二人で入ってもなんとか濡れない程度には大きい傘だった。

「ほれ、行くぞー」

というあいつの間延びした掛け声の直後、

とんつ、

と後ろから背中を押されて、たたらを踏んだ私は土砂降りの雨の中

隣には、至近距離にあいつの顔。

ニコツ、と笑う。

カツ、となつて目をそらした。

「ちょ、ちよつと、勝手に決めないでよ！」

目を合わせないまま抗議する。

「フ……、俺のスピードについてこれるかな？」

「話を聞けっ！ 意味わかんないよ！」

「こ、これは！ 伝説のエクス リバーじゃないかっ！」

「ただの傘だ！」

「いーのいーの。細かいこと気にすんなつて。ほら、いくぞ」

あいつが小さく一歩踏み出す。私をぬらさないよう、傘を私

の上にかざしたままで。

「ちよつ、だから……！ ああー、もつっ！」

とつさにあいつの横に並ぶ。それで、黒い傘があいつの上にもかかった。

あいつは、私の歩幅にあわせてゆっくりと歩きながら、

「結局、相合傘になつちまつたなあ」

「っ……!!」

また、カツ、となる。

そんな私を見て、あいつは二カツ、と笑った。

「お？ どした、顔が赤いぞ？」

あまつさえそんなことまでサラリと言つてのける。

「こつちがどんな気持ちであそこに立っていたのかも知らないで

「っ！ う、うるさい！ 右肩が濡れてる！ しっかり持って！」

「はいはい」

ホントは全然ぬれてなんかないんだけど、むしろぬれている

のはあいつの左肩のほうなんだけど、あいつは文句一つ言わず

に傘を傾けてくれた。

それから、二人とも黙つたままで歩き続けた。

やがて、大通りに差し掛かったあたりで、

「あんま気にすんなって」

ぼつりと、あいつがつぶやいた。

「……え？」

何のことかわからず戸惑う私に、

「次は、きつといいことあるからさ」

また、ぼつりとつぶやく。

その言葉で、すべてを理解した。

「……まさか、気づいてたの？」

そう問いかけるとあいつは苦笑を浮かべて、

「まあ、伊達に幼馴染やつてねーしな」

なんでもないことのように、当然だとしても言つかのようにそう答えた。

それからあいつは、呆気にとられていた私の方を振り向いて、

「そういうときはさ、我慢しなくていいんだよ」

私の目をまっすぐに受け止めて、

「思いつきり泣いちまえ。すっきりするぜ？」

いつもの笑顔で、ニカツ、と笑った。

じわ、と、目頭が熱くなるのを感じた。

なんだか悔しくて、うれしくて、なさけなくて、あったかくて、いろんな感情がごちゃ混ぜになって、涙がこぼれた。

声を出さずにつつむいた私の隣で、あいつはしょうがないな、とでも言うかのように小さく息を吐いて、

まるで、私の顔を周囲から隠してくれるかのように、

ちいさく傘がかたむいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9937p/>

umbrella

2011年4月14日01時10分発行